

柏屋町文化財調査報告書第 62 集

内橋登り上り遺跡第 8 地点

2024

柏屋町教育委員会

はじめに

本書は、宅地造成工事に伴い、令和4（2022）年度に柏屋町教育委員会が実施した内橋登り上り遺跡第8地点の発掘調査の記録であります。

調査地周辺は古代の遺跡が多く存在し、槽屋郡最大級規模の掘立柱建物や大宰府式鬼瓦が出土した内橋坪見遺跡、精巧で大型の横板組井戸と貴賃専用の精美な土師器が見つかった内橋牛切遺跡、朝鮮半島系遺物が出土した内橋鏡遺跡や内橋袖ノ木遺跡、多々良川の河口で物資集積施設として栄えた多々良込田遺跡、槽屋評（郡）衛に比定される国史跡阿恵官御遺跡などの奈良時代の遺跡が周囲にあります。さらに大宰府と都を結ぶ駅路が調査地近辺を通過していることからみしても、海上・河川・陸上交通が交わる重要な地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、内橋登り上り遺跡第8地点では、奈良時代以前の渡来系遺物が検出されるとともに、周辺遺跡の状況を勘案しても大陸と関連する先進的な地域であつたことが判明しつつあります。

本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

令和6年1月31日
柏屋町教育委員会
教育長 西村 久朝

目 次

3 経過・位置と環境	17 不明遺構	21 石敷遺構
3 調査に至る経過	18 溝状遺構	23 おわりに
3 調査体制	20 第2調査区	27 図版
3 地理的環境	20 溝状遺構	
3 歴史的環境	20 井戸状遺構	
6 調査成果		
8 遺跡の概要		
8 第1調査区		
8 掘立柱建物	発行	柏屋町教育委員会
8 柵列状遺構	調査起因	宅地造成工事
8 土坑	現地調査	令和4(2022)年10月3日～令和4(2022)年12月15日
16 ピット	整理調査	令和5(2023)年5月22日～令和6(2024)年1月31日
	使用方位	座標北(国土地理院第II系[世界測地系])、真北に対して0°17'西偏。
	遺物実測	福島118海、常盤拓生、同部有貴
	遺構実測	高橋幸作、福島日出海
	遺物製図	高橋幸作、松永メイ子
	遺構製図・遺構・遺物撮影・編集	高橋幸作
	資料整理	同部有貴、常盤拓生、常盤津由美、松永メイ子、毛利道寿代
	本書に開わる遺物・記録類は、柏屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。	

経過・位置と環境

調査に至る経過

内橋登り上り遺跡第8地点の調査は、福岡県糟屋郡柏屋町内橋東二丁目285番1において、株式会社鉢企業より令和4年4月14日に宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前審査願書が提出されたことに起因する。

当該計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋登り上り遺跡に含まれていたため、同年5月10日に確認調査を実施したところ、古墳時代から奈良時代にかけての遺構、遺物を検出した。この調査結果に基づき協議を重ねたが、工法計画の変更是難しく、記録保存の発掘調査実施後に工事を着手することとなった。発掘調査は令和4年10月3日～令和4年12月15日、発掘調査報告書作成に係る遺物整理作業は令和5年5月22日～令和6年1月31日の期間において実施した。出土遺物および図面・写真等の記録類は柏屋町立歴史資料館にて保管している。

また、地域住民の方々をはじめ、関係者の皆様には調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

令和4(2022)年度

調査主体 柏屋町教育委員会
教育長 西村 久朝
社会教育課長 白井 賢太郎
同課文化財係主幹 西垣 彰博
同課同係主査 高橋 幸作
同課同係会計年度任用職員
常盤 津由美、福島 日出海（調査担当）、松永 メイ子、毛利 須寿代

令和5(2023)年度

調査主体 柏屋町教育委員会
教育長 西村 久朝
教育委員会事務局次長 堀 哲弘
社会教育課長 白井 賢太郎
同課文化財係主幹 西垣 彰博
同課同係主査 高橋 幸作
同課同係主事 田中 康裕
同課同係会計年度任用職員
岡部 有貴、常盤 拓生、常盤 津由美、福島 日出海（報告書担当）、
松永 メイ子、毛利 須寿代

貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く、平坦な地勢の潮に冲積地は河川流域に限られている。

内橋登り上り遺跡第8地点が位置する博多湾沿岸は、多々良川・須恵川・宇美川が河口付近で合流し、古代においては入江状の内海を形成していた。遺跡はこの内海に近く、海上・河川交通の集中する地域に立地している。

歴史的環境

柏屋町周辺は、博多湾東岸に位置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。多々良川流域には、松菊里型住居で構成された渡来系稻作集落である江辻遺跡が弥生時代早期に登場する。

弥生時代には青銅器生産が知られる地域でもあり、多々良川対岸の上井遺跡群（福岡市）、多々良大牟田遺跡群（福岡市）では青銅器鋳型が出土している。柏屋町域でも、内橋坪見遺跡と内橋登り上り遺跡で青銅製鋤先、戸原鹿田遺跡で銅鏡、阿恵古屋敷遺跡では銅矛中子が出土している。青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。

このような地域的まとまりを背

地理的環境

福岡県糟屋郡柏屋町は、福岡市の東に隣接し、柏屋平野の中央に位置している。町域は14.13km²と狭く、大半が平坦な地勢である。

柏屋平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区分される。東側の三郡山地を源とする3本の河川が平野を



図1 内橋登り上り遺跡第8地点周辺図(1/25,000)

景に、古墳時代になると多々良川流域に前期前方後円墳である戸原王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳（福岡市）が築造される。その後、中期には首長系攝が途切れると、後期になると推定全長75mほどの前方後円墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌「筑前国風土記拾遺」に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、周溝を含めた全長約86m、後円部南側に横穴式石室が開口して内部に石屋形が安置されていることをはじめ、埴形埴・石室規模なども克明に読み取れる。これは那津官家の管掌者といわれる東光寺劍塚古墳（福岡市）と同規模・同主体部であり、「日本書紀」繼体22年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

また、戸原寺田遺跡では、6世紀後半から7世紀前半の鍛冶関連遺構のほか、紡いだ糸を巻き取る棒の腕木が出土するなど、手工業に関わる集落が確認されていて、それに隣接する戸原御堂の原遺跡では同時期の倉庫群も見つかって

いる。ミヤケの時代の拠点的な集落の状況も明らかになりつつある。

柏屋町は、古代において筑前国糟屋郡に属し、須恵川下流域の阿恵官衙遺跡で糟屋評衛・都術が発見され国史跡に指定されている。

阿恵官衙遺跡は、7世紀後半から8世紀後半にかけて、政府と正倉という地方官衙の主要施設の全体像を捉えながら、評衛の出現から都術の最盛期に至るまで地方官衙の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、698年の京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造春米連廣國」により、評造名が判明している。まさに、阿恵官衙遺跡の政府において「春米連廣國」が評造として政務をおこなっていたことが特定された。

8世紀前半に阿恵官衙遺跡の政府が移転した後（正倉は8世紀後半まで残る）、都術の移転先はいくつか候補地がある。谷を隔てた北側の微高地上有る阿恵天口遺跡は、阿恵官衙遺跡の政府と同じ方位の官衙建物が直交に配置されている。周辺にも官衙建物が展開している可能性がある。また、阿恵官衙遺跡の東方約0.9kmの地

点に1町四方の区画があり、「筑前国続風土記拾遺」では「長者の屋敷跡」と記されている。構造は確認できていないが、区画の方位が阿恵官衙遺跡の政府と同じであり、有力な候補地の一つである。さらに、「長者の屋敷跡」の南約100mにある原町平原遺跡では、大型の建物跡が発見されている。建物の主軸方位が正方位をとり、阿恵官衙遺跡の正倉群と同じであることから、8世紀後半の都術関連施設である可能性が高い。

また、阿恵官衙遺跡は官道が交差する衝に立地することが明らかで、そのうちの駅路は大宰府と都を結ぶ大路であり、この駅路沿いに内橋坪見遺跡が位置する。大宰府式鬼瓦、赤色顔料が付着した隅切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群と圍繞施設をともなうことから、駅家（夷守駅）の可能性が高いと考えられる。

柏屋町周辺は、都術、駅家、官道、港、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域である。

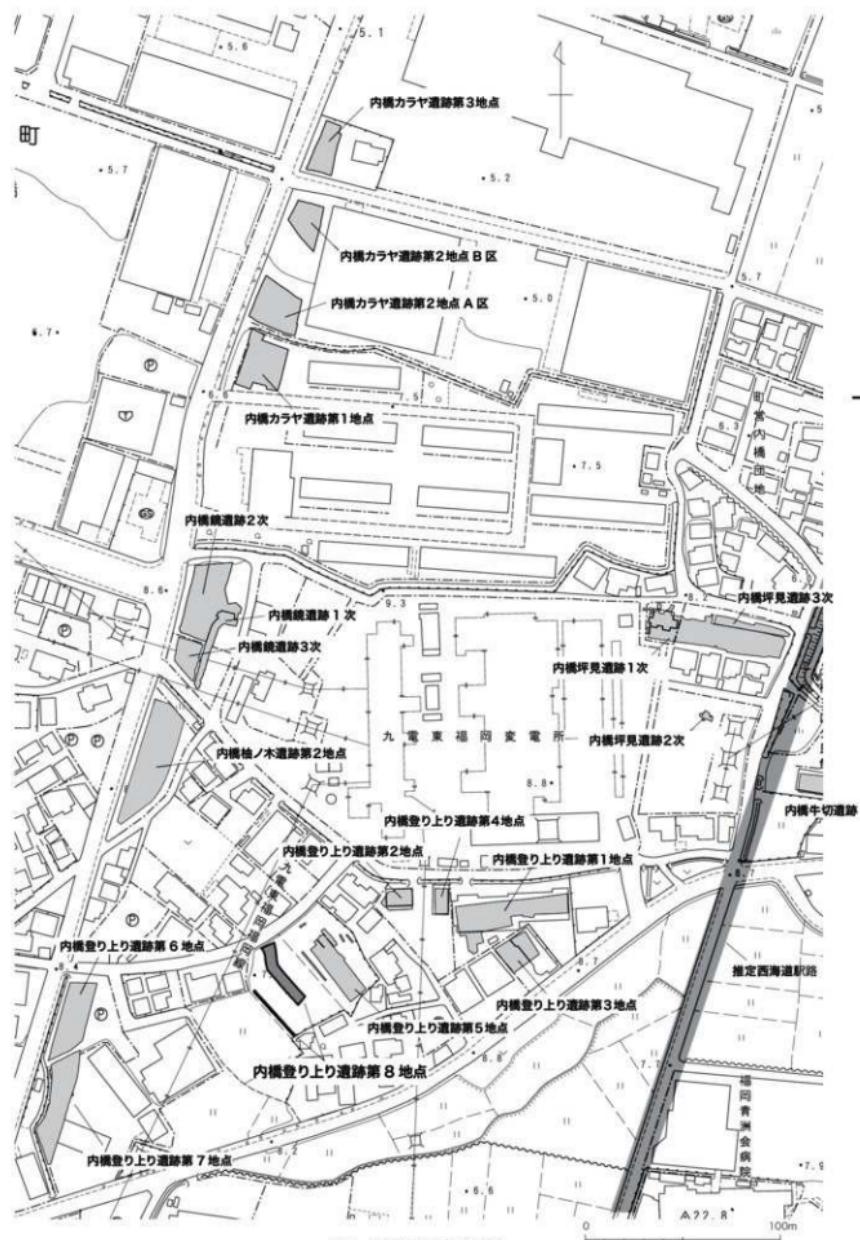


図2 調査地周辺図(1/2,500)

調査成果

当調査では、掘立柱建物3棟、土坑7基、井戸1基、溝状遺構4条、柵列等を検出した。遺物は、古墳時代後期の須恵器、土師器、赤焼土器を中心に、新羅土器（陶質）や軟質系土器が検出された。

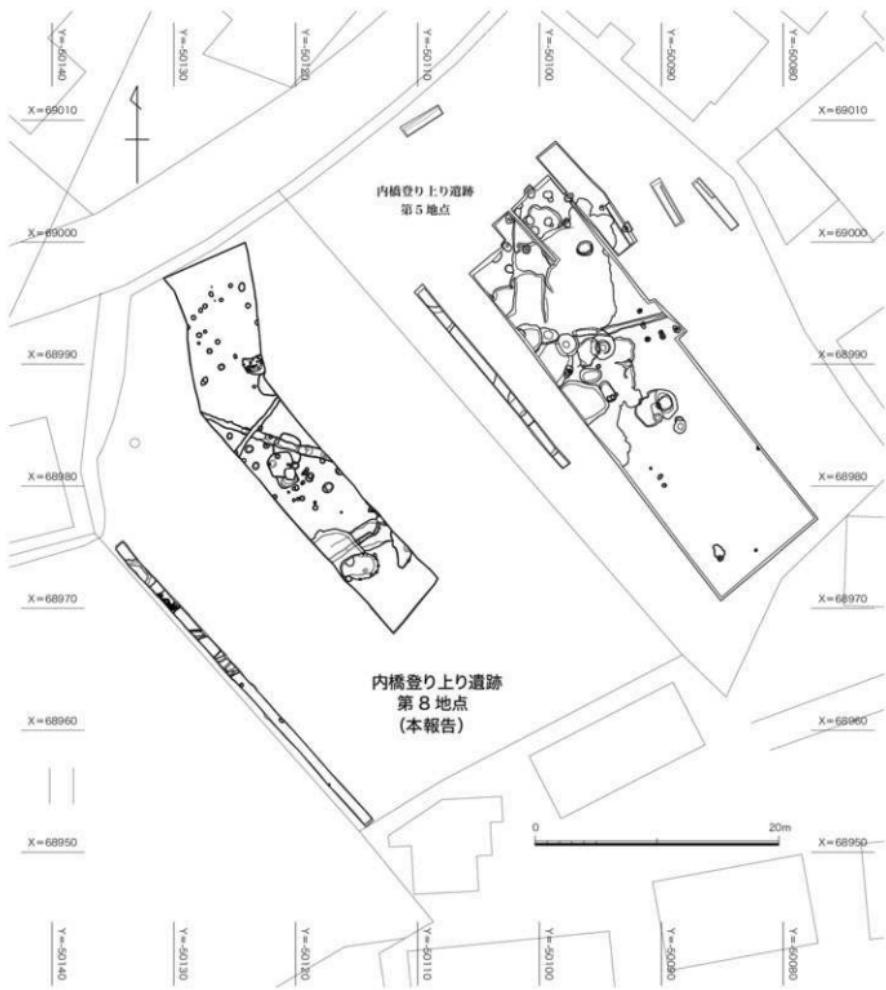


図3 内機登り上り遭跡第8地点周辺図(1/400)

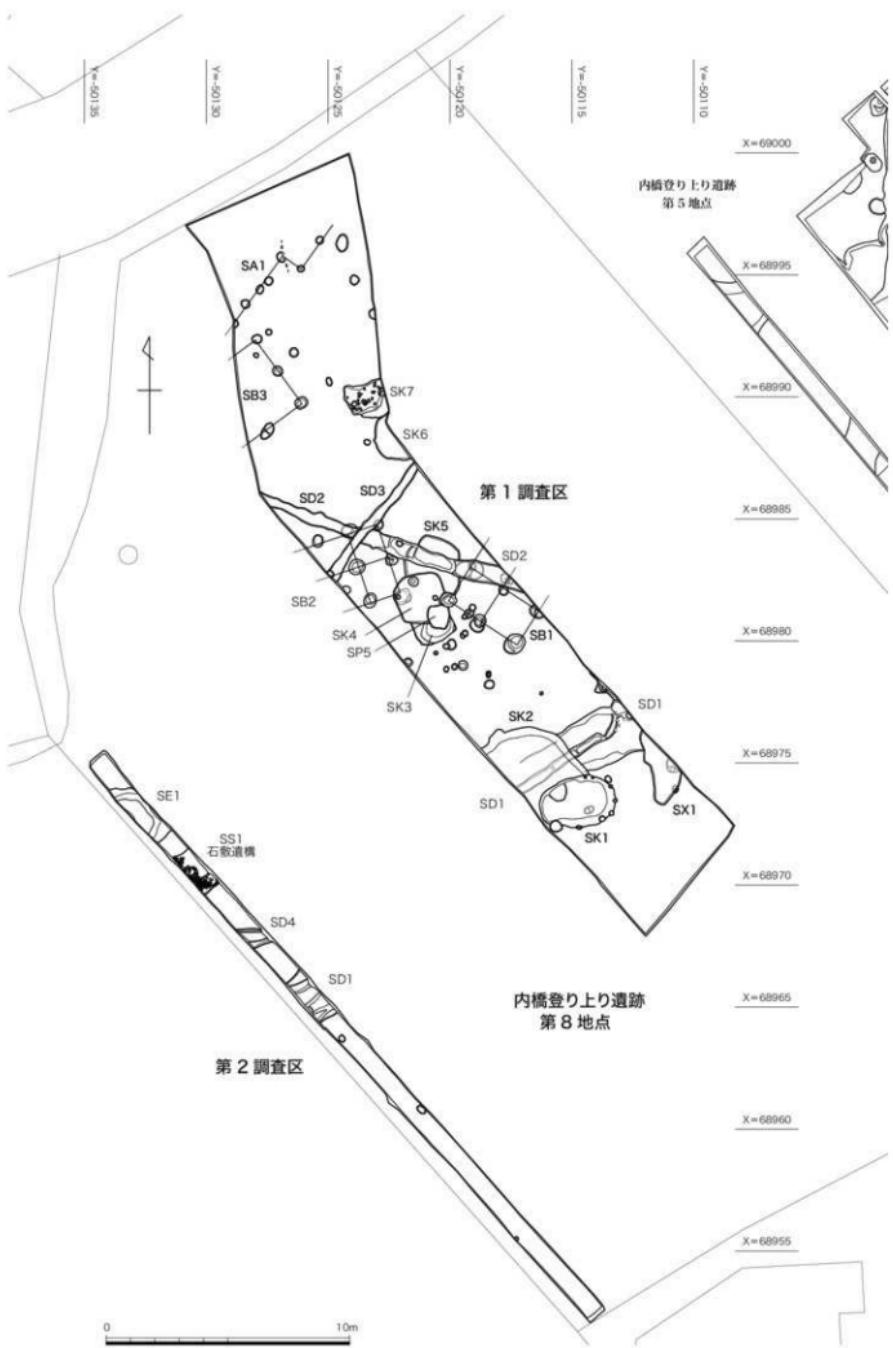


図4 内構登り上り遺跡第8地点全体図(1/200)

遺跡の概要

当遺跡は、標高約8mの微高地に立地し、古墳時代の後期を中心とする集落遺跡で、東側には内橋登り上り遺跡第5地点が隣接する。調査では、掘立柱建物3棟、土坑7基、井戸跡1基、溝状構造4条、柵列等を検出した。遺物は、古墳時代後期の須恵器、土師器、赤焼土器を中心に、新羅土器(陶質)や繩目のタタキを示す軟質系土器が検出されている。

調査は、南北に長いトレンチ状の範囲(第1調査区)と西側の細長いトレンチ(第2調査区)の2箇所について調査を行なった。

調査面積は、両調査区を合わせて約218.2m²となる。

なお、内橋登り上り遺跡第5地点の調査報告において、第1号溝状構造と記載された遺構⁽¹⁾に関し、当調査の際に東側に設けた排水路、および本調査区の確認等により、調査区の東側手前で完結する地形上の落ち込みと判明した。その状況は、当初の見解とは異なり人工的な遺構といったものではなく、自然の谷地形に近い湿地状の軟弱な地盤の範囲が、落ち込みのような状態で存在したものと考えられる。

つまり、地形的に自然と地下水がわき出る。あるいは、にじみ出ているような場所で、水源として利用したものであろう。

第1調査区

掘立柱建物(SB)

SB1(図5)

建物は、SK4、SK5、SP5を切り、SD2に切られて存在する。

その規模は、梁間間3.3m、桁行間2.6m以上を測り、柱穴の並びから総柱構造と考えられ、柱間は1.5m前後を測る。主軸方位はN-32.4°-Eを示す。

SB1出土遺物(図5)

1 須恵器杯身。立ち上がりは直立する。残存高3.2cm、立ち上がり0.8cmを測る。2 須恵器有蓋高杯蓋。つまみは幅半ばん擬宝珠状を呈し、表面にヘラ記号を付す。残存高2.8cm、つまみ径3.4cm、つまみ高1.1cm。3 須恵器高杯。脚部は末端が肥厚し屈折して立ち上る。残存高1.4cm。4 赤焼土器甕。口縁部は大きく外反し、下部は三角突帯状に突出する。残存高2.3cm。5 赤焼土器甕。口縁端部前方は凹面状を呈し、上部が突出する。残存高3.5cm。6 赤焼土器甕。口縁部は大きく緩やかに外反し、口縁端部がわずかに肥厚する。残存高4.2cm。

SB2(図6)

建物は、SK4、SD2、SD3に切られて存在する。

その規模は、梁間間3.0m、桁行間2.0m以上を測り、柱間は梁間側が1.5m、桁行は1.3mと狭く総柱構造と考えられる。主軸方

位はN-18.4°-Wを示す。

SB3(図7)

建物は、SB1・SB2に比べ柱穴の規模が小さく、梁間間3.2m、桁行3m以上、柱間は、桁行側が1.8mを測ることから、側柱の建物と考えられる。主軸方位はN-36.2°-Wを示す。

柵列状遺構(SA)

SA1(図7)

柵列は、7個のビットが南西から南東に並列するが、南東の2個は、列の並びから直角に小さな折れをつくり、約0.8m離れて位置する。柱穴は削平が進むためかなり浅くなっている。主軸方位はN-35.7°-Eを示す。

SA1出土遺物(図7)

1 須恵器金属器模倣椀。体部に2条の沈線を配す。残存高3.0cm。

土坑(SK)

SK1(図8)

平面形は楕円形状を呈し、床面の一部が2段に掘り込まれる。ただし、周囲の小ビットは全て上から切り込んだもので、直接の関係はない。長さ3.1m、幅2.05m、

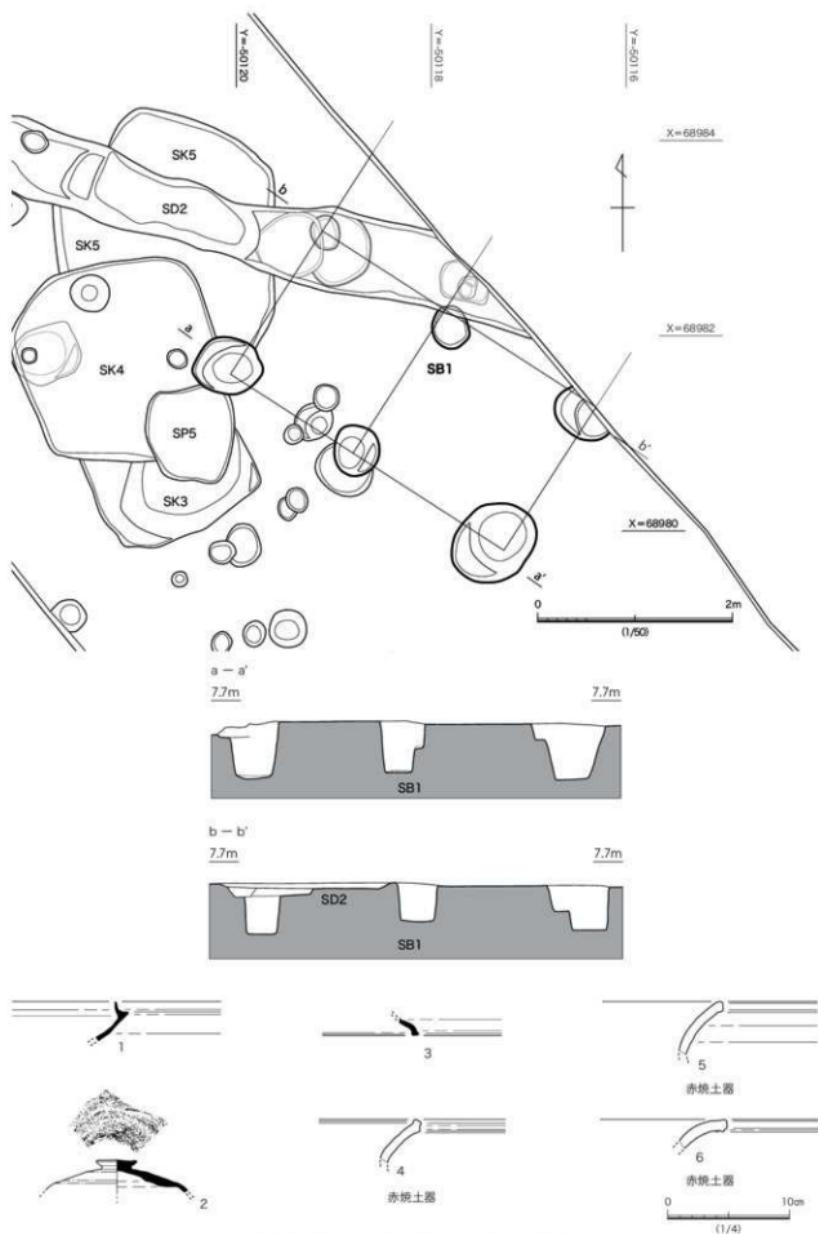


図5 SB1 平面図、断面図 (1/50)、出土遺物実測図 (1/4)

深さ 0.25 m を測る。SD1、SK2 を切る。

SK1 出土遺物(図 9)

1 須恵器杯蓋。口縁部は内面にかえりを持ち、その上部に沈線状の段を有す。口径 12.0cm、残存高 1.9cm。2 須恵器杯蓋。口縁部は屈折して直立する。残存高 2.3cm。3 須恵器壺。胸部はソロバン玉状の菱形を呈す。残存高 10.1cm、最大径 19.8cm。4 須恵器高杯。脚部は大きく張り、端部の上下が突出するため、凹線状の窪みとなる。残存高 1.2cm。5 須恵器甕。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に突出する。その正面と下端部に沈線を配す。口縁部中央には、2 条の沈線を配し、上部に柳描の波状文を施す。残存高 29.5cm。6 須恵器壺。胸部は大きく張り出し、胸部上面の表裏両面には、丁寧なヨコナデが施され、下部表面はタタキメ、内面には当具痕が観察される。残存高 13.8cm。7 須恵器甕。胸部上半は緩やかな曲線で、表面に不明瞭ながらタタキメの後にカキメが施され、内面は当具痕が観察される。残存高 10.8cm。8 赤焼土器瓶。口縁部は直立気味に立ち上る。口縁端部は肥厚し、下部の内外両面とともに凹線状に窪む。表面はタタキメ、内面には当具痕が観察される。残存高 8.0cm。9 土師器甕。口縁部が大きく屈折する。残存高 5.3cm。

SK2(図 8)

平面形は開丸の方形、もしくは長方形と考えられるが、現況では判断できない。SK1 に大きく切られるが、SD1 を切ってつくらされている。長さ 3 m 以上、深さ

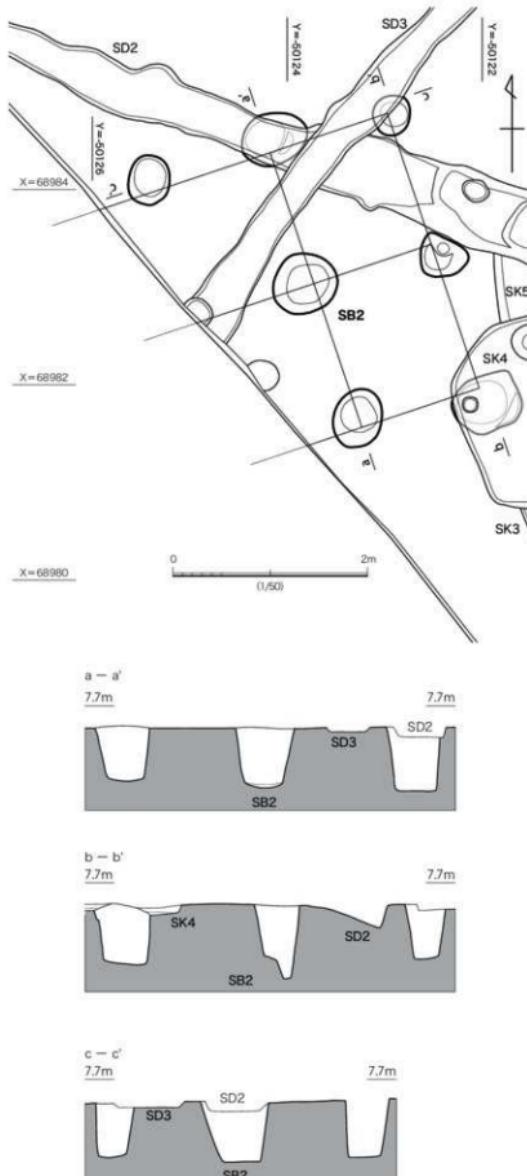


図 6 SB2 平面図、断面図 (1/50)

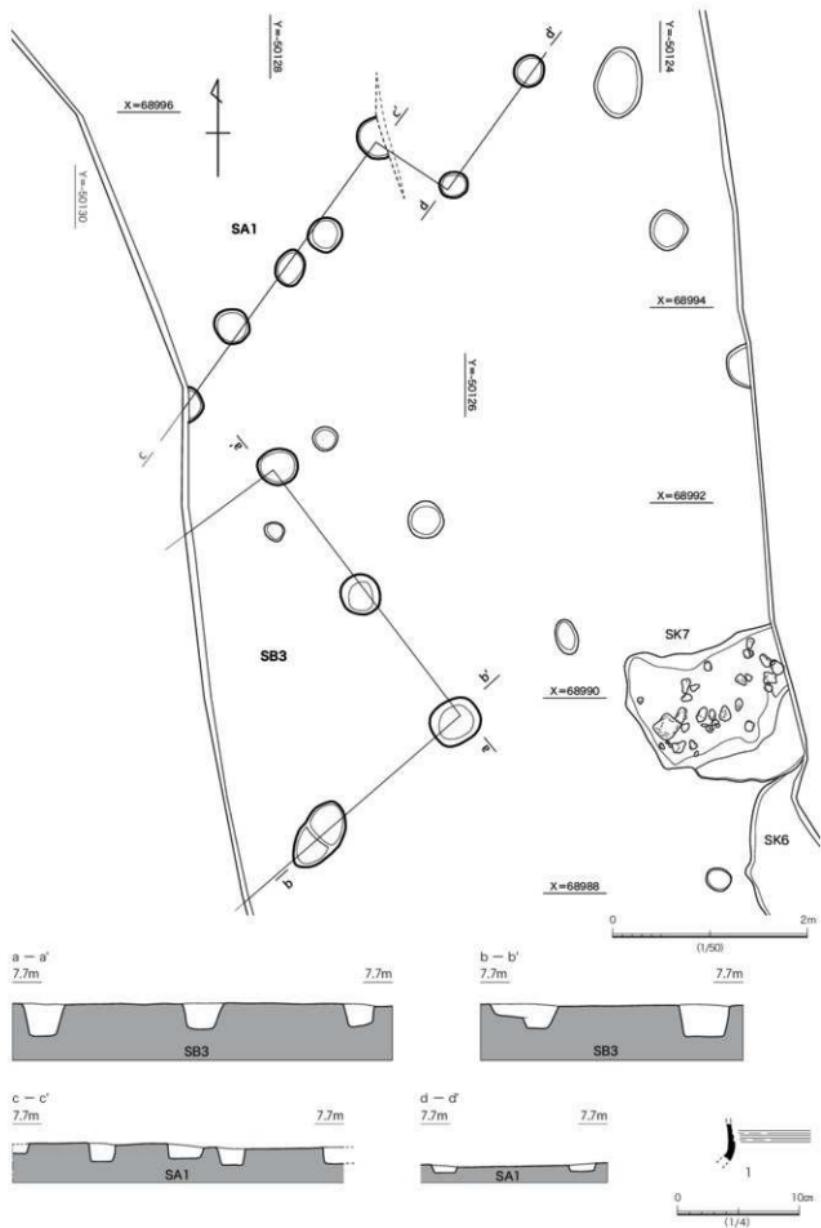
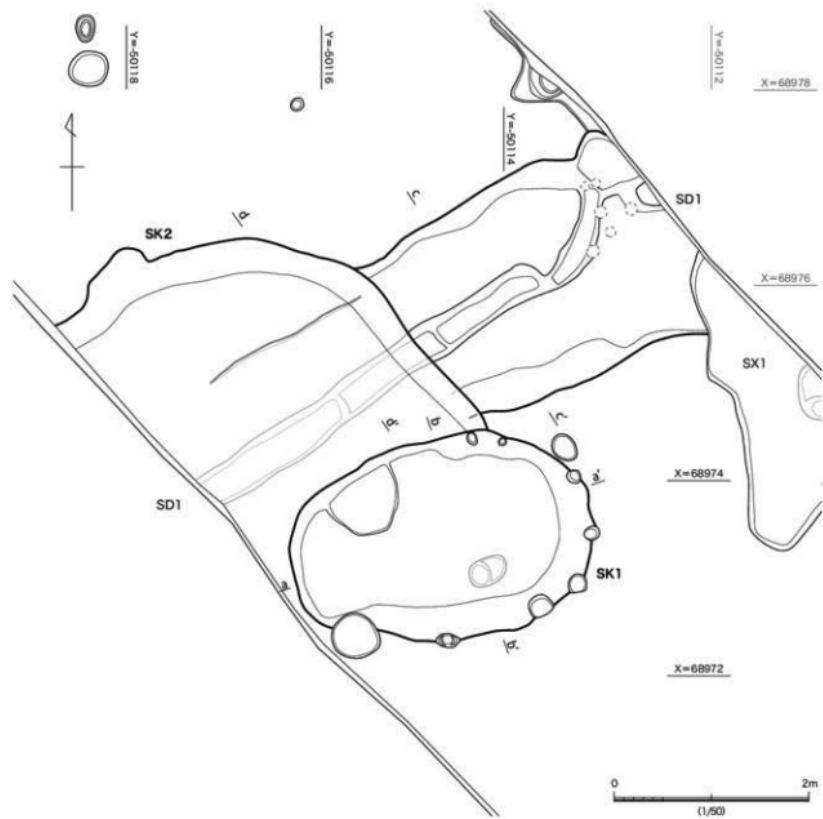


図7 SB3, SA1 平面図、断面図 (1/50), SA1 出土遺物 (1/4)



a - a'
7.7m



7.7m

b - b'
7.7m



7.7m

c - c'
7.6m



d - d'
7.6m



図8 SK1, SK2, SD1平面図、断面図(1/50)

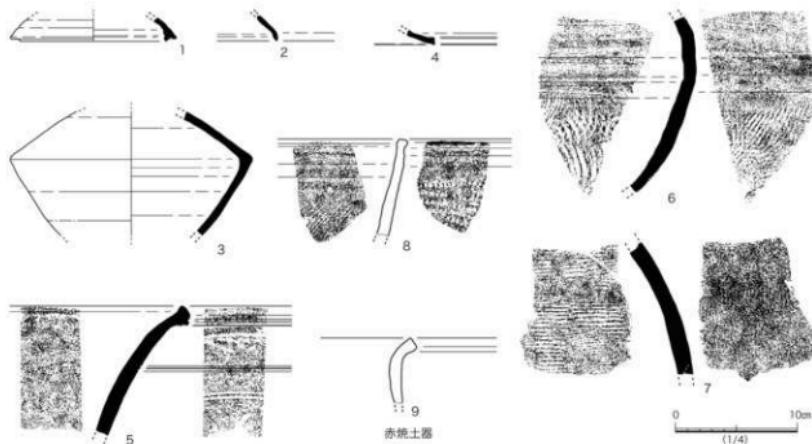


図9 SK1出土遺物実測図(1/4)

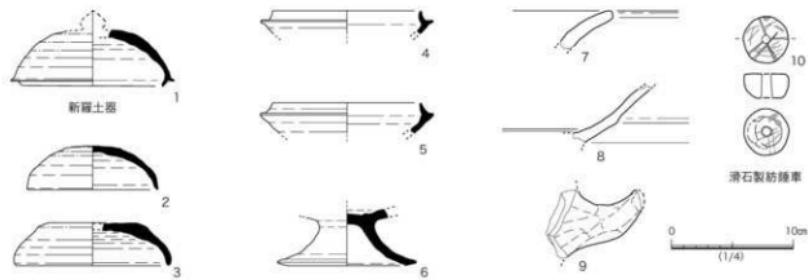


図10 SK2出土遺物実測図(1/4)

0.20mを測る。

SK2出土遺物(図10)

1 新羅土器蓋。つまみ部分(宝珠形)は欠損する。無文で半球形の体部下方に突帯状の張り出し部を設け、その下に内傾する口縁部を有しており、ト字形蓋⁽²⁾に該当しよう。外面上部は回転ヘラケズリ、下方はナデを施す。口径11.4cm、残存高4.6cm、色調は外面が灰色、内面は青灰色を呈し、器壁内部は赤紫色を示す。胎土・焼成は良好で、内外両

面ともに自然釉が付着する。2須恵器杯蓋。全体が丸味を帯び、口縁部付近で緩やかに屈折する。口径10.6cm、器高3.6cm。3須恵器杯蓋。口縁端部は内湾し丸味を帯びる。天井部は平坦で厚みがあり、ナデにより仕上げる。口径12.4cm、器高3.5cm。4須恵器杯身。立ち上がりは低く、端部が直立し、体部内面が屈折する。口径12.0cm、残存高1.9cm、立ち上り高0.8cm。5須恵器杯身。立ち上がりは低く、端部が直立し、体部内面が屈折ぎみとなる。口径

12.0cm、残存高2.5cm、立ち上り高0.8cm。6須恵器高杯。短脚で端部がラッパ状に開く。残存高4.6cm、底径11.4cm。7土師器蓋。口縁部は大きく開き、口縁端部が若干丸味を帯びる。残存高3.1cm。8土師器高杯。杯部外面に段を有す。残存高4.6cm。9土師器瓶。牛角状の把手部で、ユビナデで仕上げる。残存高8.0cm、幅3.6cm、厚さ3.1cm。10滑石製紡錘車。断面形は湾曲した逆台形状で、上部と底部の各面に線刻が施される。高さ2.0cm、最大

径 3.7cm、孔径 0.7cm ~ 0.9cm。

SK3(図 11)

2段に掘り込まれた浅い土坑で、SK4、SP5に切られる。長さ 1.45m、深さ 0.14m を測る。

SK3 出土遺物(図 12)

1 須恵器杯蓋。口縁部は緩やかに屈折する。口径 13.8cm、残存高 3.8cm。2 須恵器高杯。短脚で裾部が屈折する。残存高 4.1cm。3 軟質系土器甕。口縁部は S 字状に屈折し、肩部に段を持つ。外面には不明瞭ながら縦に網目的タキメが残り、内面には半円状の当具痕が観察される。色調はにぶい橙色。胎土に石英粒を多く含み、焼成は良い。残存高 4.3cm。4 土師器瓶。底部中央の支柱で、長さ 4.5cm、幅 2.8cm、厚さ 1.5cm。

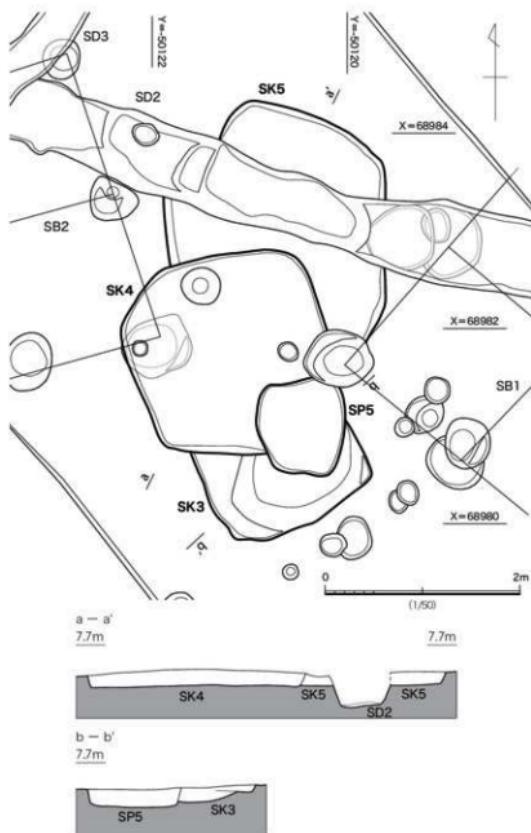


図 11 SK3、SK4、SK5、SP5 平面図、断面図 (1/50)

SK4(図 11)

平面形は隅丸方形を呈す。SB1、SP5 に切られ、SB2、SK3、SK5 を切る。長さ幅とともに 1.8 m、深さ 0.15m を測る。

SK4 出土遺物(図 12)

1 須恵器杯蓋。口縁部は屈折する。口径 14.0cm、残存高 3.5cm。2 須恵器杯蓋。口縁部は緩やかに湾曲する。残存高 3.0cm。3 須恵器杯蓋。体部は直線的なラインを示す。口径 13.8cm、残存高 3.3cm。4 須恵器甕。口縁部は直線的に外反し、下方に 1 条の沈線を配す。口径 12.0cm、残存高 1.6cm。5 軟質系土器甕。胎土上半が張り出し、丸底の底部に続くと考えられる。全体に薄手のつくりで、器壁厚 0.2cm ~ 0.5cm。外面は網目のタキメが斜方向に

施され、下方にはナデが施される。内面には円形の窪み状に残る当具痕が観察される。色調は暗褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。残存高 20.4cm。6 土師器高杯。口縁部は直線的に開き、外方に段を有す。脚部はラッパ状に大きく開く。口径 14.5cm、器高 8.2cm、底径 10.8cm。7 赤焼土器甕。口縁端部は肥厚する。残存高 2.5cm。8 赤焼土器甕。口縁端部は角張る。残存高 3.4cm。9 赤焼土器甕。口縁部は緩やかな

曲線を示し、口縁端部をつまみ上げる。残存高 4.0cm。10 赤焼土器甕。口縁部は緩やかな曲線を示し、口縁端部を丸く納める。残存高 4.3cm。

SK5(図 11)

平面形は隅丸方形を呈し、SB1、SK4、SD2 に切られる。長さ 2.15 m、幅 2.2m 以上、深さ 0.12 m を測る。

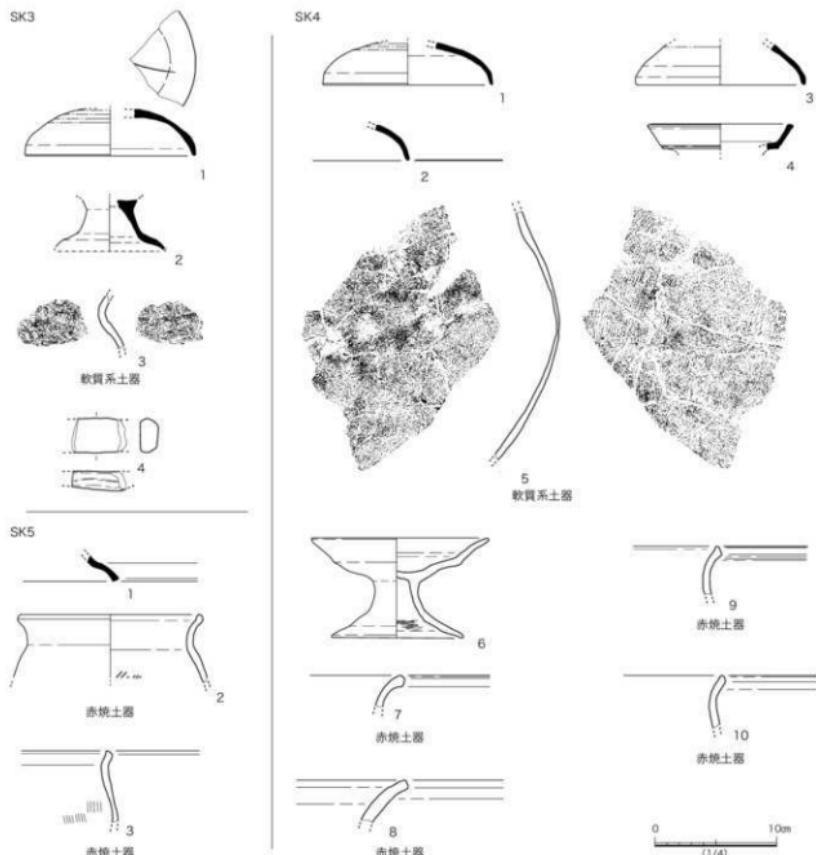


図 12 SK3、SK4、SK5 出土遺物実測図(1/4)

SK5 出土遺物(図 12)

1 須恵器高杯。脚部は SK3-2(図 12)と同様、短脚で裾部が屈折する。残存高 2.1cm。2 赤焼土器甕。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部の内面が突帯状に突出する。内面は当具痕が観察される。口径 13.6cm、残存高 5.2cm。3 赤焼土器甕。口縁部はわずかに外反し、直口に近い。口縁端部の内面が嘴状に突出する。内面に当具

痕が観察される。残存高 5.8cm。

SK6(図 13)

平面形は開丸方形で、浅い掘り込み。長さ 2.1m、幅 1.6m 以上、深さ 0.08m を測る。

SK6 出土遺物(図 13)

1 須恵器杯蓋。天井部の破片で回転ヘラケグリ調整が観察される。残存高 1.9cm。2 須恵器甕。

上半部の破片で、表面には、横位の平行タキメとその後カキメが施され、内面は平行文当具痕が観察される。残高 9.6cm。

SK7(図 13)

不整形な 2 段掘り込みの構造で、床面に礫が集中する集石土坑の様相を呈す。長さ 1.7m、幅 1.5m、深さ 0.13m。

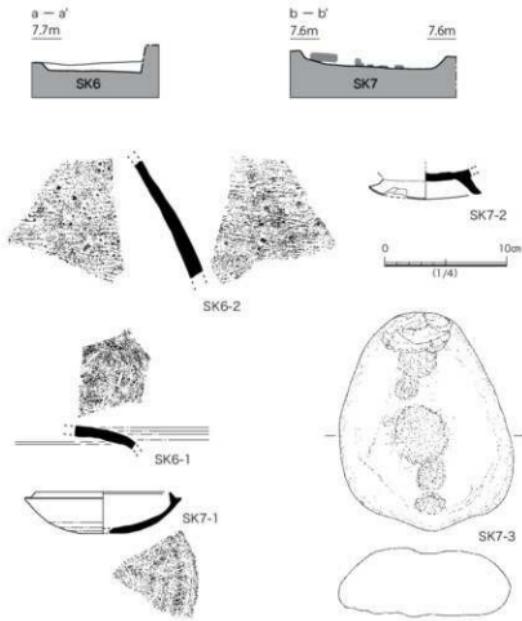
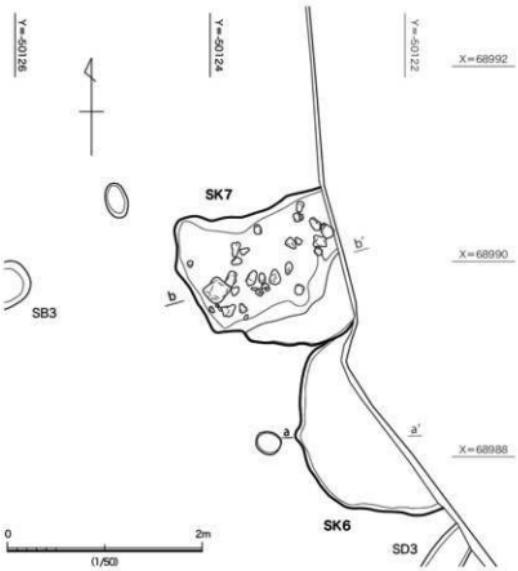


図 13 SK6, SK7 平面図、断面図(1/50)、出土遺物実測図(1/4)

SK7 出土遺物(図 13)

1 須恵器杯身。口縁部の形状は、SP5-5(図 14)に近似し、受部付近が厚味のあるつくりで、口縁部内面は緩やかに湾曲する。外面底部付近にヘラ記号を有す。口径 11.0cm、器高 3.4cm、最大径 12.8cm、立ち上り高 0.5cm。
2 須恵器杯身。高台は高く、外方に強く張り出す。残存高 2.5cm、底径 8.5 ~ 9.2cm。3 くぼみ石。白玄武岩の扁平な自然礫を使用する。実測図の面には 5 箇所のくぼみがあり、裏面中央にも浅いくぼみが 1 箇所存在する。長さ 19.8cm、幅 14.0cm、厚さ 5.3cm。

ピット(SP)

SP5(図 11)

平面形は長さ 1.0 m四方の方形を呈し、深さは 0.15 mを測る。

SP5 出土遺物(図 14)

1 須恵器杯蓋。器高は高めで全体に丸味のある形状を呈す。口径 13.25cm、器高 4.5cm。2 須恵器杯蓋。形状は 1 に近似するが、口縁部が屈折気味となる。残存高 3.8cm。3 須恵器杯身。体部は丸味を帯びるが浅めのつくりで、底部付近にヘラ記号を有す。口径 11.8cm、残存高 3.4cm、立ち上り高 0.7cm。4 須恵器杯身。立ち上りは直線的に内傾し、体部のラインも直線的となる。口径 10.8cm、器高 3.85cm、最大径 13.2cm、立ち上り高 1.0cm。
5 須恵器杯身。受部付近は厚味のあるつくりで、口縁部内面が緩やかに湾曲する。口径 13.0cm、残

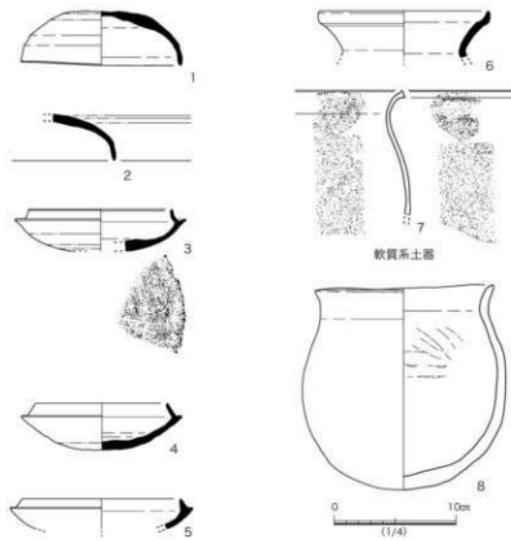


図 14 SP5 出土遺物実測図 (1/4)

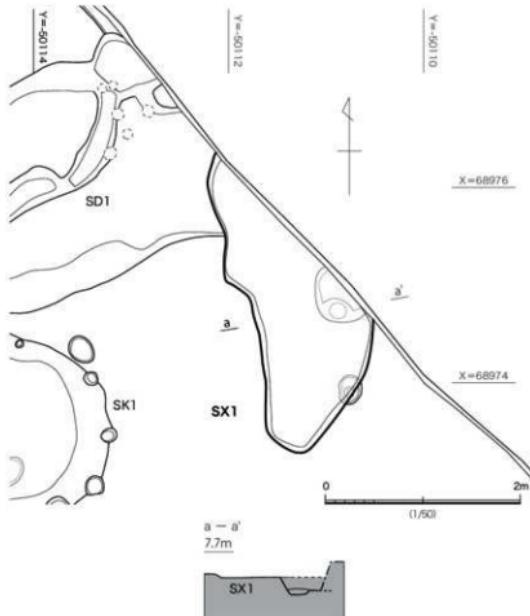


図 15 SX1 平面図、断面図 (1/50)

存高 2.5cm、最大径 15.0cm、立ち上り高 0.7cm。6 須恵器甕。口縁部はつまみ上げられ、低い二重口縁状を呈す。口径 14.0cm、残存高 3.6cm。7 軟質系土器甕。口縁部は緩やかに大きく外反し、口縁端部を上下につまみ出す。長胴気味で、器壁が 0.4 ~ 0.5cm と薄手のつくりである。器面等の調整は、壁面の風化で判別にくいが、頸部や胴部下方に継縫の細縫(縫目か)がわずかに観察され、内面の頸部付近には、これもかすかであるが、弧状の凹線が横位にならび、当具痕の可能性がある。色調はにぶい橙色、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良い。残存高 10.2cm。8 土師器甕。口縁部は緩やかに外反し、丸底を呈す。口径 14.6cm、器高 16.8cm。

不明遺構 (SX)

SX1(図 15)

平面形は不整形で浅く掘り込まれており、内部にピットが位置する。長さ 1.6 m 以上、幅 1.2 m 以上、深さ 0.1 m を測る。

SX1 出土遺物 (図 16)

1 須恵器金属器模倣甕。口縁部は直立し、口縁端部が尖頭状を呈す。体部中央に 2 条の沈線がめぐり、底部は丸味を帯びた平底を呈す。口径 8.7cm、残存高 4.9cm。2 土師器甕。口縁部は緩やかに外反し、垂直気味の胴部へと続く。内面は粗いハラケズリを施す。残存高 8.1cm。3 赤焼土器甕。口縁部は外反し、長胴気味の胴部へと続く。外面は継縫のタクキメの後にカキメが施され、内面は当具痕



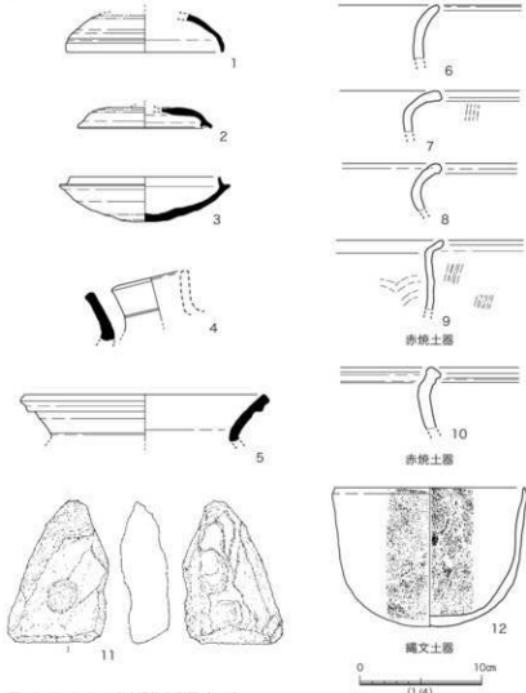
図 16 SX1、SD1 出土遺物実測図 (1/4)

が観察される。口径 17.7cm、残存高 16.6cm。**4** 赤焼土器甕。表面にはタタキメ、内面には当具痕が観察される。残存高 6.0cm。**5** 滑石製鋸鍼車。長さ 4.2cm。

溝状遺構 (SD)

SD1(図 8)

2段掘り込みの溝状遺構で、2段目の掘り込みは幅が狭く、整った直線状を呈す。1段目が幅 2.2m、深さ 0.12 m。2段目が幅 0.2m を測る。



SD1 出土遺物 (図 16)

1 須恵器杯蓋。口縁部は緩やかに屈折し、口縁部上部には沈線状のラインが存在する。口径 13.0cm、残存高 3.1cm。**2** 須恵器杯蓋。体部は扁平で口縁部内面にカエリを有す。口径 11.0cm、残存高 1.7cm。**3** 須恵器杯身。立ち上がりは内傾し短い。口径 12.2cm、器高 3.7cm、最大径 14.0cm、立ち上り高 0.65cm。**4** 須恵器平瓶。口縁部の破片で、頸部近くに 1 条の沈線がめぐる。口径 6.7cm、残存高 3.8cm。**5** 須恵器甕。口縁部は外反し、肥厚した口縁端部の中央が凹線状に窪む。口径 20.4cm、残存高 3.9cm。

6 土師器甕。口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は丸味を持つ。

残存高 4.5cm。**7** 土師器甕。口縁部は大きく外湾する。残存高 3.3cm。**8** 土師器甕。口縁部は大きく外湾し、口縁端部が肥厚気味に丸味を帯びる。残存高 3.9cm。

9 赤焼土器甕。口縁部は屈折気味に外反し、口縁端部を丸く納める。外面はタタキメ、内面には当具痕が観察される。**10** 赤焼土器甕。口縁部は外反し、胴部の内外両面に、凹線状の窪みが見られる。残存高 5.1cm。**11** 滑石原材。二等辺三角形状を呈し、周囲に粗い加工が施され、中央付近には皿状の浅い窪みが存在する。全長 11.5cm、幅 7.8cm、厚さ 3.7cm。

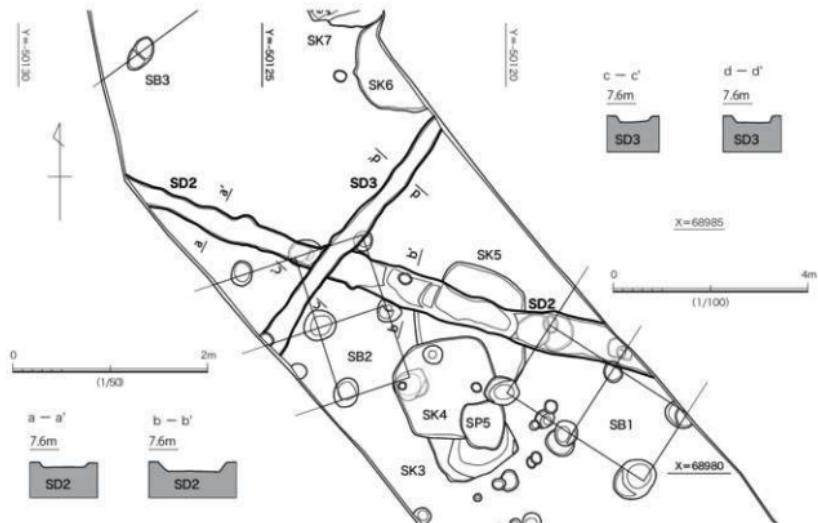


図 17 SD2, SD3 平面図(1/100)、断面図(1/50)

12 繩文土器深鉢。当資料は小形の部類になろうか。口縁部は直立し、口縁端部が内傾気味に屈折する。胴部上半がわずかに内湾し、底部は半球状の丸底を呈す。また、底部外面の中央部がわずかに窪む。器面調整は、内外の両面とともに、横位の条痕が施され、内面の下半には、幅約 0.5cm の粗いミガキが間隔をあけて縦位に施されている。口径 15.6cm、器高 11.4cm。

SD2(図 17)

調査区中央付近に位置し、東西方向に延びており、SB1, SB2, SK5 を切り、SD3 に切られる。幅 0.65 m、深さ 0.1 m を測る。

SD2 出土遺物(図 18)

1 須恵器杯蓋。口縁部は湾曲氣味となる。口径 12.0cm、残存高 2.6cm。2 須恵器杯蓋。口縁部は

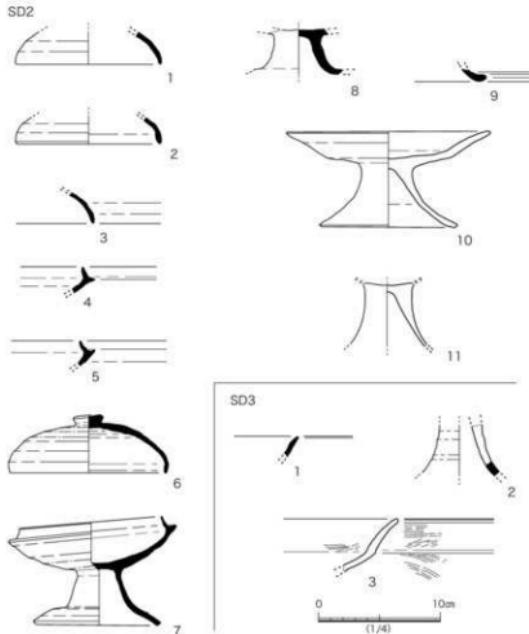


図 18 SD2, SD3 出土遺物実測図(1/4)

屈折し、肥厚した端部に続く。口径 12.0cm、残存高 2.2cm。3 須恵器杯蓋。口縁部は緩やかに湾曲する。残存高 2.5cm。4 須恵器杯身。立ち上がりは内傾し、体部内面の屈折面が沈線状を呈す。残存高 2.2cm。5 須恵器杯身。立ち上がりは内傾し、内面に弱い屈折のラインが観察される。6 須恵器有蓋高杯蓋。口縁部は内湾し、扁平なボタン状のつまみが付く。

口径 13.1cm、器高 4.8cm、つまり径 2.6cm、つまり高 0.8cm。

7 須恵器有蓋高杯。脚部は屈折して大きく開く。口径 11.6cm、器高 9.0cm、底径 10.5cm。6 と組み合わさる。8 須恵器高杯。短脚で湖が強く開く。残存高 3.7cm。

9 須恵器高杯。脚部は屈折し、端部を丸く納める。残存高 1.0cm。

10 土師器高杯。口縁部は大きく開き、下方が屈折する。脚部は幅広で大きく開く。口径 16.7cm、器高 7.9cm、底径 10.9cm。11 土師器高杯。残存高 5.2cm。

SD3(図 17)

調査区中央付近に位置し、南北方向に延びており、SB2、SD2 を切る。幅 0.35 m、深さ 0.04 m を測る。

SD3 出土遺物(図 18)

1 須恵器杯身。口縁部は開き、口縁端部内面のヨコナデにより先端がやや銳利となる。残存高 1.7cm。2 須恵器高杯。脚部にはスカシ孔を有す。残存高 4.3cm。3 土師器高杯。口縁部はわずかに内湾しつつ開く。下方に段を有す。残存高 4.3cm。

第 2 調査区

溝状遺構 (SD)

SD1(図 19)

第 1 調査区 SD1 の西側の続きに相当する。溝は、1 条の溝中に 2 本の流路が並列し、全体の幅 2.2 m、最深は 0.64 m を測る。

SD1 出土遺物(図 20)

1 須恵器杯身。口縁部の立ち上りは内傾し、体部は直線的で、厚手のつくりである。口径 11.2cm、器高 4.1cm、最大径 13.4cm、立ち上り高 0.9cm。2 須恵器甕。当資料は、薄手のつくりで、表面には格子状のタタキメ、内面には車輪文の当具痕が観察される。あまり見受けられない資料である。残存高 4.3cm(2a)、5.7cm(2b)。器壁厚 0.5 ~ 0.6cm。3 敷質系土器甕。胴部下半で、丸底に移る部分と考えられる。表面 上部には、縦位に縄目のタタキメが観察されるが、その特徴から繩文と考えられる。上部の一段程が明確に観察されるが、その下方はナデケシされている。内面は判然としないが、上部は横位、そのすぐ下からは斜位のユビナデが観察される。薄手のつくりで器壁厚 0.5cm。色調は浅黄橙色、胎土に微砂粒を含み、焼成は良い。残存高 8.6cm。

SD4(図 19)

2 段掘り込みの構造で、幅 0.87

m、深さ 0.35 m を測る。

井戸状遺構 (SE)

SE1(図 21)

平面形は円形と考えられ、断面形は V 字状を呈すが、部分的に側面が緩やかな段状の箇所が観察される。幅 3.0 m、深さ 0.9 m を測る。

SE1 出土遺物(図 22)

1 ~ 6 は須恵器杯身、全て高台部分である。

1 幅広で直立するが低い。底径 8.4cm、残存高 1.0cm。2 幅広で内側に張る。3 幅が狭く華奢なつくりである。4 外側に張るが華奢なつくりである。5 丸味を帯びている。6 低く退化傾向にある。7 須恵器甕。胴部下半で外面はタタキメの後カキメを施す。内面は無文の当具痕であろうか、当具についたキズが 1 本の単線状にしている。残存高 6.4cm。8 土師器杯身。外側に張り出した高い高台が付される。口径 11.4cm、残存高 3.6cm。9 平瓦。表面は縄目のタタキ痕。裏面に布目痕、コピキ痕が観察される。厚さ 2.0cm。10 平瓦。表面はナデ、裏面に布目痕が観察される。

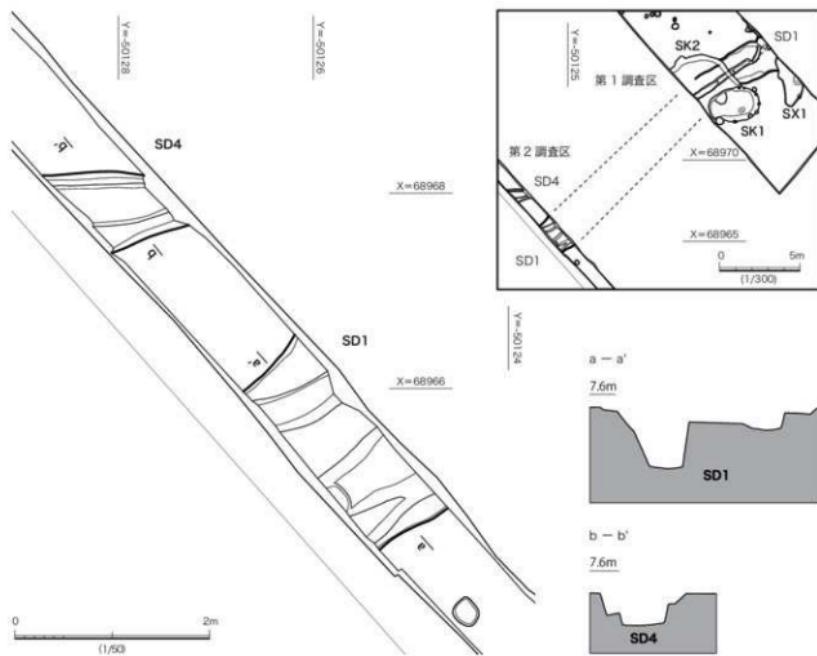


図 19 SD1、SD4 平面図、断面図 (1/50)、SD1 延長平面図 (1/300)

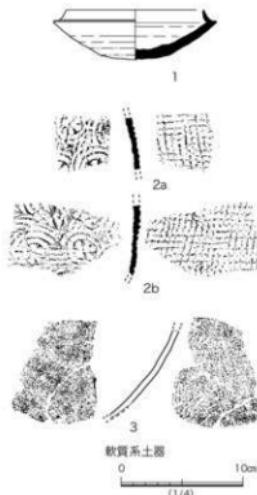


図 20 SD1 出土遺物実測図 (1/4)

石敷遺構 (SS)

SS1(図 21)

SE1 の南側に隣接する。当遺構の南側は、明確な 1 段掘り込みの掘方を呈すが、北側の SE1 に接する部分の掘方は、緩やかな傾斜を示し、掘方の位置が不明瞭となる。石敷きは、底面より 5 ~ 10cm ほど浮いた状況で、2 ~ 3cm の小礫が敷かれた上に、10cm 以上の礫が乗っている状況が見られる一方で、かなり抜けた部分も見受けられる。SE1 と石敷きは一体となって機能するもので、類例には内橋塙ノ木遺跡第 2 地点の SE3 と石敷き遺構との組み合わせがある⁽³⁾。長さ 2.25m、深さ 0.2m を測る。

SS1 出土遺物 (図 22)

1 土師器杯身。口縁部はやや開き、口縁端部は尖り気味に丸味を帯びる。口径 14.0cm、残存高 3.1cm。2 土師器杯身。高台は幅広で、外側にやや張り出す。底径 9.4cm、残存高 1.4cm。3 土師器杯身。身の底部は丸味を帯び、高台は高く外方に張り出す。底径 7.2cm、残存高 1.8cm。4 土師器杯身。高台は高く、外方に張り出す。底径 7.0cm、残存高 1.9cm。5 平瓦。表面は縄目のタキ痕、内面には布目痕とコビキ痕が観察される。厚さ 2.7cm。6 平瓦。全体に風化が進んでおり、内面に布

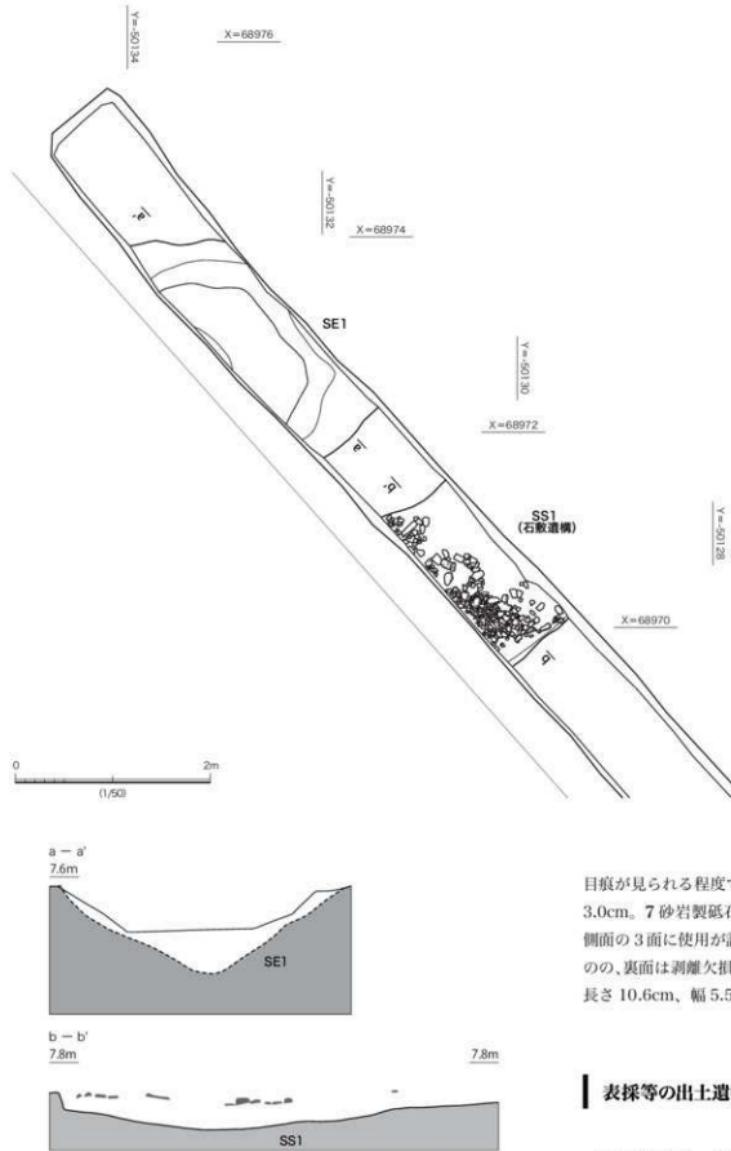


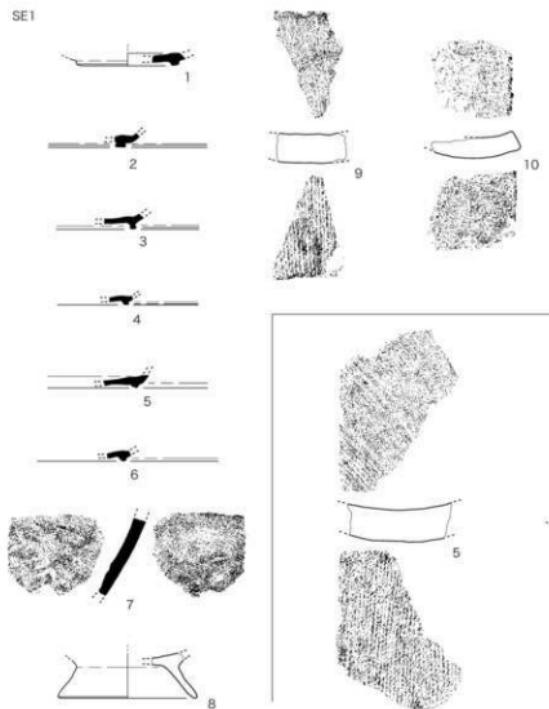
図21 SE1,SS1 平面図、断面図 (1/50)

目痕が見られる程度である。厚さ3.0cm。7砂岩製砥石。表面と両側面の3面に使用が認められるものの、裏面は剥離欠損のため不明。長さ10.6cm、幅5.5cm。

表掲等の出土遺物(図22)

1 須恵器杯蓋。全体に丸味を帯びて器高も高い。口縁端部は丸く納める。口径13.8cm、残存高

SE1



調査結果

図22 SE1, SS1, 表探出土遺物実測図 (1/4)

4.1cm。2 須恵器杯蓋。1 と同様の形状で、口縁部にわずかに稜線が観察される。口径 14.0cm、器高 5.1cm。3 須恵器杯身。口縁部の立ち上りはやや高く、内傾する。全体に丸味を帯び、深さがある。口径 11.9cm、器高 4.7cm、最大径 13.8cm、立ち上り高 1.0cm。

4 須恵器鉢。胸部下半資料で、底部へ向かいやや内湾気味となる。底部付近は屈折して稜線がめぐる。器面の調整は、外面がヨコナデ、回転ヘラケズリとなる。内面は丁寧にヨコナデされている。残存高 13.5cm、底径 16.7cm。なお、内面等の調整より鉢と考えたが、

別の器種の可能性もある。

おわりに

今回の調査では、狭い範囲の調査にもかかわらず、総じの建物、

土坑(廐棄)、溝状遺構といった各遺構が検出された。それらは、共伴等の遺物から、概ね6世紀後半～末を中心とし、一部7世紀に及ぶ遺構群と考えられる。また、8世紀代の奈良時代に相当する遺構も認められ、古墳時代後期～古代に継続する。

ここでは、東に隣接する内橋登り上り遺跡第5地点で検出された、調査区中央の自然の谷地形に近い軟弱な地盤の範囲を中心として、その周間に建物等の遺構が存在する状況が明らかとなった。また、中央の谷地形内には地下水を利用するための井戸が集中しており、水場を中心に営まれた集落部分の一端が示された。今後は水場を含めた集落構造等の検討も可能となろう。

特記事項として、新羅土器蓋SK2-I(図10)が得られたが、これは、遺構内出土土器が示す古

墳後期の時期と矛盾しないと考えられる。また、古墳時代後期の遺物に混在する形で、第1調査区より、縄文土器SD1-12(図16)や半島系軟質土器SK3-3(図12)、SK4-5(図12)、SP5-7(図14)が、第2調査区からも、半島系軟質土器SD1-3(図20)が得られた。

以上、調査区設定の関係上、検出された各遺構は断片的なものであり、内容の検討は困難と考えられる。しかし、遺物に関しては、新羅土器や軟質系土器が認められることから、ここでは、近年の検出例も含め、ある程度の紹介等を行なうべきと考える(表1、表2)。

なお、町内出土の半島系土器に関しては、「内橋登り上り遺跡7地点」の報告⁽⁴⁾で、6世紀末～7世紀以降の資料を中心に紹介しております、当報告と合わせてご参照いただきたい。

註

- (1)柏屋町教育委員会 2020『内橋登り上り遺跡5地点』柏屋町化財調査報告書 第53集
- (2)崔秉炫 2018「新羅後期土器の編年」『古文化談叢』第81集 古文化研究会
- (3)柏屋町教育委員会 2020『内橋抽ノ木遺跡2地点』柏屋町化財調査報告書 第55集
- (4)柏屋町教育委員会 2023『内橋登り上り遺跡第7地点』柏屋町文化財調査報告書 第61集

番号	通路	種別	器種	調整等	数量	報告書	図番号	時期	備考
1		米涼土器	鉢	静手糸切	1				
2	阿南古屋敷遺跡	粗質土器	平底鉢	ヘラケズリ、ヘラ状工具ナデ	1	A	図14-6 図39-13 図39-14	弥生時代後期	
3	第2地点	粗質土器	平底鉢	ヘラケズリ	1				
4		瓦質土器	広口壺	タタキメの痕跡	1		図68-3		
5	御木原遺跡	瓦質土器	広口壺	柄子タタキメ	1	B	図56-2	弥生時代後期	
6		瓦質土器	広口壺	柄子タタキメ	4		図60-4～7		
7		陶質土器	甕	繩塵文、柄子タタキメ、平行条線	1				No6と同一個体
8		陶質土器	甕	平行条線	1				No7と同一個体
9		陶質土器	甕	平行タタキメ、平行条線	1				
10	厘敷前遺跡	陶質土器	甕	柄子タタキメ	1				
11		陶質土器	杯		1				
12		陶質土器	杯		1				
13		陶質土器	高杯		1				
14		陶質土器	蓋植不明		3				
15		粗質土器	甕	平行タタキメ、平行文当具痕 中空把手？	1		図7-8		
16		粗質土器	甕	平行タタキメ、放射状当具痕	1		図10-45		
17	戸原寺田遺跡	陶質土器	甕	平行タタキメ、平行条線 放射状当具痕	1	C	図14-64	古墳時代中期から後期	No33と同一個体
18		陶質土器	甕	平行タタキメ、平行条線 放射状当具痕	1		図14-65		
19		粗質土器	平底鉢	タタキメ、ヘラケズリ	1		図14-67		
20		粗質土器	広口壺	平底、ヘラケズリ	1		図18-21		
21		粗質土器	平底鉢	ヘラケズリ、ハケメ状ナデ	1		図31-34		
22		粗質土器	多孔式瓶		1		図44-37		
23	戸原寺田遺跡	陶質土器	甕	平行タタキメ、平行条線 放射状当具痕	1	D	図44-38		No17と同一個体
24	第2地点	陶質土器	杯蓋		1		図54-59	古墳時代中期から後期	
25		陶質土器	杯身		1		図54-58		
26		陶質土器	瓶（つまみ）		1		図54-57		
27		陶質土器	脚台？		1		図31-35		
28		新羅土器	無形壺	カキメ状	1		図54-56		
29		新羅土器	甕		1		図10-1	6世紀末	
30		新羅土器	甕	タタキメ、当具痕	1		図12-3		
31	内側登り上り遺跡	新羅土器	甕	繩目タタキメ、ユビオサエ ユビナデ	1	E	図12-5	古墳時代前期～中期	
32		新羅土器	甕	タタキメ、当具痕	1		図14-7		
33		新羅土器	広口壺	繩塵文、ナデケシ	1		図20-3		
34		新羅土器	甕	繩目タタキメ、当具痕	1		図9-4		
35	内側登り上り遺跡	新羅土器	甕	有溝把手	1	F	図9-6	6世紀末～	
36	第7地点	新羅土器（軟質）	小壺		1		図14-3	7世紀前半	馬骨多数出土
37		新羅土器	窓把手	有溝把手	1		図14-10		

表1 収集出土の朝鮮半島系土器

番号	遺跡	種別	器種	調整等	数量	報告書	図番号	時期	備考
38		新羅土器（軟質）	小型	タタキメ、当具痕、ナデケシ	1		図15-13		
39		新羅土器	壺		1		図18-8		
40	内橋登り上り遺跡 第7地点	軟質系土器	瓶把手	有溝把手	1	F	図24-12	6世紀末～	馬骨多數出土
41		新羅土器（軟質）	小型	タタキメ、当具痕、ナデケシ	1		図31-67	7世紀前半	
42		軟質系土器	瓶	縄目・タタキメ、当具痕	1		図31-68		
43		軟質系土器	壺	縄目・タタキメ、当具痕	1		図31-69		No.42と同一個体
44	内橋登り上り遺跡 第2地点	南朝土器	壺	交織帶（13束）、凹線	1	G	図14-135	6世紀後半以降	削制無台壺の模倣
45	内橋坪見遺跡3次	縁輪陶器	壺	鏡文	1	H	図25-19	7世紀	
46	内橋塙遺跡3次	新羅土器	楕球形瓶	半円天文、三角文	1	I	図26-35	6世紀末～ 7世紀前半	
47	阿恵遺跡	新羅土器	壺		1	J	図17-1	7世紀中頃	段階出土
48	内橋登り上り遺跡 第5地点	新羅土器	つまみ	宝珠形	1	K	図9-42	6世紀末～	
49		軟質系土器	鉢	カキメ状の沈線	1		図10-68	7世紀前半	
50		軟質系土器	鉢		1	F	図33-10		
51	内橋塙／木遺跡 第2地点	軟質系土器	瓶把手	有溝把手	5	L	34図56～60	6世紀末～ 7世紀前半	

- A. 粕屋町教育委員会 2021『阿恵古屋敷遺跡第2地点』粕屋町文化財調査報告書第54集
- B. 粕屋町教育委員会 2022『部木原遺跡』粕屋町文化財調査報告書第59集
- C. 粕屋町教育委員会 2017『戸原寺田遺跡』粕屋町文化財調査報告書第41集
- D. 粕屋町教育委員会 2023『戸原寺田遺跡第2地点』粕屋町文化財調査報告書第60集
- E. 粕屋町教育委員会 2024『内橋登り上り遺跡第8地点』粕屋町文化財調査報告書第62集（本報告）
- F. 粕屋町教育委員会 2023『内橋登り上り遺跡第7地点』粕屋町文化財調査報告書第61集
- G. 粕屋町教育委員会 1997『内橋登り上り遺跡第2地点』粕屋町文化財調査報告書第11集
- H. 粕屋町教育委員会 2015『内橋坪見遺跡3次』粕屋町文化財調査報告書第38集
- I. 粕屋町教育委員会 2020『内橋カラヤ遺跡第2地点・内橋カラヤ遺跡第3地点・内橋鎧遺跡3次』粕屋町文化財調査報告書第51集
- J. 粕屋町教育委員会 2018『阿恵遺跡』粕屋町文化財調査報告書第43集
- K. 粕屋町教育委員会 2020『内橋登り上り遺跡第5地点』粕屋町文化財調査報告書第53集
- L. 粕屋町教育委員会 2021『内橋塙ノ木遺跡第2地点』粕屋町文化財調査報告書第55集

表2 司内出土の朝鮮半島系土器

図版



第1調査区全景(南北)



第1調査区全景(北西から)



第2調査区全景(北西から)



SBI [第1調査区] (南西から)



SBI [第1調査区] (北から)



SB3 [第1調査区] (南東から)



SA1 [第1調査区] (南西から)



SK1 [第1調査区] (南から)



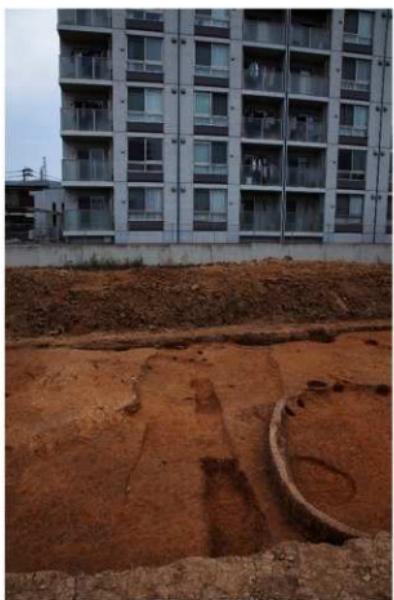
SK2 [第1調査区] (北から)



SK3, SK4, SK5, SP5【第1調査区】(南から)



SK7【第1調査区】(西から)



SD1【第1調査区】(南西から)



SD2【第1調査区】(北西から)



SD3〔第1調査区〕(南西から)



SD1〔第2調査区〕(北から)



SE1〔第2調査区〕(北から)



SD4〔第2調査区〕(東から)



SE1 土解〔第2調査区〕(北東から)



石敷造構〔第2調査区〕(北東から)



石敷造構〔第2調査区〕(南東から)



SK2-1(図10)【つまみ復元】



SK4-6(図12)



SK2-10(図10)



SP5-1(図14)



SP5-8 (図 14)



SD2-6 (図 18)



SD1-3 (図 16)



SD2-7 (図 18)



SD1-11 (図 16)



SD2-10 (図 18)



SD1-12 (図 16)



表掲-3 (図 22)

報告書抄録

ふりがな	うちはしのぼりあがりいせきだい 8 ちてん							
書名	内橋登り上り遺跡第8地点							
シリーズ名	柏屋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	福島日出海、高橋幸作							
編集機関	柏屋町教育委員会							
所在地	〒811-2314 福岡県糟屋郡柏屋町若宮一丁目1番1号							
発行年月日	2024年1月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内橋登り上り遺跡 第8地点	福岡県糟屋郡柏屋町 内橋東二丁目 285番1	403491	280082	33°37'12"	130°27'30"	2022.10.3 ～ 2022.12.15	218.2m ²	宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
内橋登り上り遺跡 第8地点	集落	古墳時代～奈良時代	掘立柱建物、土坑、溝状遺構、棚列状遺構	土師器、須恵器、新羅土器、石器	新羅土器、軟質系土器の出土			
要約	<p>当調査では、掘立柱建物3棟、土坑7基、石敷を伴う井戸状遺構1基、溝状遺構4条、棚列等が検出された。掘立柱建物のうち、2棟が竪柱建物であり、土坑はいずれも施設用と考えられる。</p> <p>遺物は、古墳時代後期の須恵器や土師器、赤焼土器を中心に出土がみられた。その他に新羅土器、軟質系土器、繩文土器やくぼみ石などが検出された。</p>							

内橋登り上り遺跡第8地点 柏屋町文化財調査報告書第62集

令和6(2024)年1月31日 発行

発行 柏屋町教育委員会

〒811-2314 福岡県糟屋郡柏屋町若宮一丁目1番1号 (柏屋町立歴史資料館)

印刷・製本 株式会社 博多印刷

〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町8番5号